



学習院アーカイブズの設立と課題

はじめに

学習院アーカイブズは2011年4月、それまでの総務部総務課院史資料室を改組し、法人直属の事務部署として発足した。その目的は「学習院アーカイブズ規程」に、「本院の経営、教育・研究活動及びこれらの活動に伴う事務処理において作成され、収受される史資料のうち、将来に残すべき価値のある史資料を評価選別し、保存・管理する組織として設立する」とうたわれている。この文言にあるように公文書館や国立大学アーカイブズにならって、非現用となった文書や資料の移管を受けて評価・選別を施し、学習院という学校の歴史を示す資料として保存・活用することをめざしている。

1. 設立までの経緯

学習院の淵源は幕末の京都に設置された公家の学問所にあるが、華族の教育機関として東京に開業した1877年（明治10）を創立として、135年の歴史を有する。戦前に宮内省所轄の官立学校であった学習院は、第二次世界大戦敗戦直後の存続の危機を乗り越え、1947年（昭和22）から私立学校として再出発するという特異な歩みを経てきた。1970年代から80年代にかけて『学習院百年史』の編纂が行われた際、収集された資料を保管する院史資

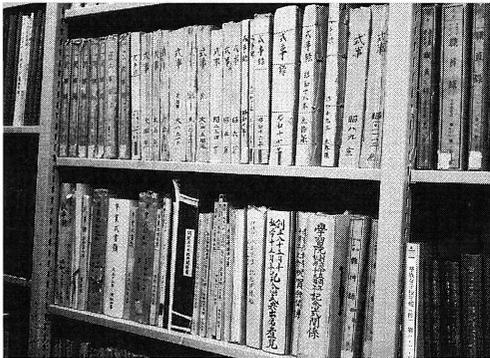
料室が1981年に設置された。百年史編纂時に作成された資料目録や教員履歴などのカードは、現在も資料検索や問い合わせ対応の有効なツールとして利用されている。1990年代には『学習院大学五十年史』の編纂作業にともない、戦後期や新制大学期の資料が調査・収集された。こうした年史編纂を契機に事務文書の一部が院史資料室に移され、大学設置時の認可申請書をはじめ教務・施設・例規・式事などの文書や、広報のため撮影された写真などが保存されてきた。文書の移管はとくに規定されていなかったが、実際には「大切そうだから置いといてよ」といった感覚での移管が行われてきた。

学習院大学には2008年から大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻が開設され、2004年に発足した日本アーカイブズ学会も、学習院大学を拠点として活動してきた。とはいえ学習院そのもののアーカイブズ整備は、他の私立大学に比べて立ち遅れていた。学習院の歴史に関する問い合わせや資料閲覧の申し込み件数が多いにもかかわらず、院史資料室の存在は目立たない状態が続き、学校の歴史資料を経営戦略としていかに活用するかについて、長い歴史を有する私学の割には消極的な姿勢が続いていたのである。こうした状況を打開すべく院史資料室を改組し、学内の各部署が作成・保管してきた事務文書等を受け入れる役割を明示して、学習院アーカイブズが発足するに至った。

2. 業務と所蔵史資料の概要

学習院アーカイブズには下記のような資料が段ボール箱に換算して約1,100箱収蔵され、目録作成やデジタル化が進められている。

- ①戦前期官立時代の公文書（教務・日誌・式辞・土地建物・人事ほか）
- ②戦後期の文書（私立改組関係、設置認可関係、教務・事務文書ほか）
- ③個人資料（元教職員・卒業生等からの寄贈、講義ノート、生徒作品ほか）
- ④写真（古写真・広報・卒業生等から収集）
- ⑤学習院発行の印刷刊行物（学生新聞・学校案内・履修要覧ほか）
- ⑥モノ資料（バッヂ・門標・乃木希典遺品ほか）
- ⑦磁気メディア、文献類、その他



アーカイブズ書庫

所蔵資料の中心は①と②で、いうまでもなく大部分が過去の業務の中で作成されてきた事務・教務関係の文書である。たとえば1885年（明治18）の教務日誌には日本初のランドセルの使用が記され、華族女学校の式事録には津田梅子の英語の授業を昭憲皇太后が参観した記録がある。1912年（大正1）9月の庶務課日誌には乃木希典院長の自刃が「驚愕悲痛措ク所ヲ知ラズ」と記されるなど、学習院のみならず日本近代史をみるうえで興味深い内容が含まれている。現在作成される事務文書も、将来には21世紀の学習院を理解するための重要史料となる可能性があり、恒常的な文書の移管は欠かすことができない。

③の個人資料は教職員・卒業生およびその家族などから寄贈される資料で、先日も90歳の女子学習院卒業生が来校し、在学中の1938年（昭和13）の紀元節に記した式辞を寄贈いただいた。寄贈者は学習院という学校に愛着を抱いて所蔵品をアーカイブズに託すのだから、学校が卒業生など所属者との結びつきが強い組織であることを改めて感じる。個人資料の寄贈に応えることは学校アーカイブズとしての責務であり、収集された資料がそのアーカイブズの特徴を形成するであろう。④の写真はさまざまな用途で利用される機会が多く、現在学内に保存されている古写真のデジタル化を進めている。⑤⑥⑦については言及を省略するが、学校案内や履修要項・学園祭パンフレットといったありふれた印刷物も、バックナンバーを累積すると貴重な歴史資料となることはいうまでもない。

以上のような資料に対する閲覧希望や問い合わせなど、いわゆるレファレンス件数は2011年度で130件を超え、所蔵資料を卒業論文や修士論文に利用した学生もいた。学内には大学史料館という博物館相当施設があるため、展示の企画や所蔵資料の提供など協力を行っている。昨今の大学では自校史教育が定着しつつあるが、筆者も「近代日本と学習院」という教養科目を担当し所蔵資料を随時紹介している。学生は潜在的に所属する学校の歴史や資料に興味を持つためか、今年度の履修者は250名を超え学生の反応にも手応えを感じる機会が多い。

3. 課題一文書移管までの流れ作りと選別

学校法人学習院は、幼稚園から大学までの8学校を運営し、2012年度の在籍学生生徒数13,868名・専任教職員数813名という規模である。キャンパスは東京都豊島区目白（本部・大学・高等科・中等科・幼稚園）、新宿区戸山（女子大学・女子高等科・女子中等科）、新宿区四谷（初等科）に分かれ、それぞれが独自の歴史を持っている。学習院アーカイブズは3キャンパスすべての部署の文書・資料

の保存に関わるが、アーカイブズが一元的に管理するのではなく、基本として各キャンパスがそれぞれ保管し、「どこに何がある」という情報をアーカイブズが整理し把握しておく体制をめざしている。アーカイブズが移管に対応するための収蔵スペースを備えておらず、各部署の必要に応じて可能な作業から着手するか、あるいは今後に向けての課題を確認する程度しかできないのが現状である。学習院初等科には明治以来の教材や標本など、数多くの教育資料や文書等が未整理のまま残されている。まずは倉庫の中を改め仮目録を作成することが必要だが、これを通常業務に忙殺される現場の教職員に頼むのは無理であろう。そこでアーカイブズのスタッフが調査および整理に足を運び、そのことによって現場の教職員との信頼関係を築いていくことが重要となる。

アーカイブズが発足する前の2009年に学内各部署を対象として行われたアンケート調査では、多くの部署が文書保管スペースの不足を回答し、コストをかけて外部倉庫に保管を委託している部署もあった。学習院では1994年に「学習院事務文書取扱規程」が施行され、「文書取扱責任者又はその上司は、その所管に属する文書について文書保存期間区分表の細目を作成し、文書総括責任者に届け出るものとする」と定められている。しかし永久・10年・5年等の保存期間を文書ごとに定めていない部署が多く、現用なのか非現用なのか判然としない文書が倉庫に堆積している。「非現用文書はアーカイブズへ移管する」と唱えても、何から移管すればよいのかさえよくわからないのが実状である。さらに大学の学部学科研究室・小中高校の教員室といった教学部門が保管する文書については、文書取扱規程に則らない状態でこれまで保管され、あるいは廃棄されてきた。当面は明らかに日常業務で使用しない文書や、移管希望のあった文書・資料に対応しながら、可能な部分から移管のルールを模索することになるだろう。

移管された文書の選別をどのように進める

かも大きな課題である。学習院女子中・高等科（通称女子部）では校舎の建て替えにともない、2010年度に段ボール約150箱強の非現用文書が倉庫から運び出され、女子部とアーカイブズが協力して仮目録作りを進めてきた。仮目録のための整理はまもなく終了するが、その後どのように選別を実施して残すべき文書と廃棄文書により分けるか、検討をすすめるなければならない。これから試行錯誤が続くであろうが、女子部文書の整理と選別を先例として、学校全体の適切な文書管理および保存のシステム作りに展開していけるものと考えている。

以上のように、非現用文書の移管に関しては流れを形成するに至っていないが、所蔵する資料や情報に対する学内外からのニーズは、充分にあると手応えを感じている。今後学内での信頼を上げ、他大学や他機関の事例に学びながら着実に業務を形作ってきたい。

〔学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎〕